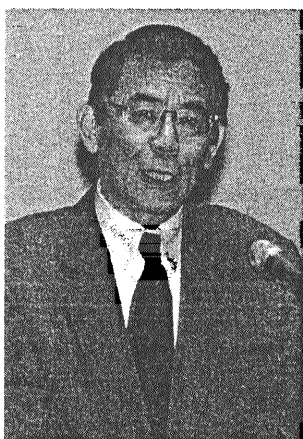


# 公開セミナー「岐路に立つODA」レポート

日本の開発途上国援助は、2004年に50周年を迎えた。この間、03年までの実績で計185カ国・地域に政府開発援助（ODA）が供与され、経済・社会の発展に重要な役割を果たすとともに、国際社会の日本への信頼を醸成してきた。03年には新大綱、05年には中期政策が決定され、現在、援助実施機関の一元化などのODA改革論議が進められている。

こうした中、大きな転機を迎えているODAの今後の方向性について考える公開セミナー、「日本のODAは今—岐路に立つODA—」が3月14日、東京・東銀座の時事通信ホールで開催された。



講演する渡辺拓殖大学学長

セミナーでは、ODA総合戦略会議議長代理を務める渡辺利夫・拓殖大学学長が、「日本のODAをどう考えるか」をテーマに講演。ODA民間モニター3人からの報告会も併せて行われた。民間モニター事業はODAの現場を国民が直接、視察するもので、1999年度から毎年実施されている。

渡辺氏は日本の半世紀にわたるODAについて、

借款の供与により東アジアのインフラを建設することで産業発展を支えるものであったと説明。「東アジアが世界有数の海外直接投資の受け入れ先となり、経済成長を果たすことができたのは、日本のODAによるインフラ整備があったため」と評価し、ODAは民間企業の開発効果を発揚させる「触媒」であり、今後は知的インフラ支援の比率を高める必要があると指摘した。理念については「一国の発展に奇跡は無く、営々たる努力の積み重ねにより発展は軌道に乗るのであり、自助努力を引き出すODAでなければならない」と、自助努力を理念とする日本型ODAの意義を再確認した。

また渡辺氏は、「海外での武力行使は律しているが、資源は圧倒的に途上国に依存している日本にとって、ODAは日本の外交力の最も重要な源泉である」とし、

「最も重要な外交手段はODAでなければならない」と、ODA外交の重要性について力説した。

民間モニターとしてベトナムを視察した伊藤恵さん（学校職員）は、「インフラ整備が貧困削減や長期的な発展につながる」ことを確認し、ODAの印象が「押し付け」から「対話の中で共に働く事業」へと一変したと言う。エジプトにジャボニカ米の水田が広がっていたことに感動を覚えたと言う松井聰さん（社会科教員）は、「志があり、人と人がつながれば、素晴らしいことができる」と実感した。セネガルの魚市場などを視察した清水唯史さん（会社員）は、アフリカ支援、対象地域外への事業の波及や継続性、自立性などを今後の課題として挙げた。

セミナーの最後には、国際ボランティア・ライブコンサートが開かれ、心地よいハーモニーで人気のデュオ、COUSIN（カズン）が登場。国際ボランティア年（01年）イメージソングとなった「ひまわり」や「ふるさと」、パキスタンのアフガン難民キャンプ訪問で感じた空気を歌にした「未来の空気」など8曲を熱唱した。「音楽を通して何ができるのか、いつも考えている」と言う2人の透明感のある歌声に、会場は和やかな空気に包まれた。